

## 2 北 の 山 城

千 田 嘉 博

- 
- |            |               |
|------------|---------------|
| はじめに       | 3 安藤氏と城郭群     |
| 1 村の城の系譜   | 4 列島からみた東北の山城 |
| 2 堀による郭の成立 |               |
- 

### 論 文 要 旨

従来、遺構に即した踏み込んだ検討が行われてこなかった東北北部の山城について、墳館・唐川城・柴崎城・尻八館を事例に検討を行った。この結果、墳館は10世紀末～11世紀にかけての古代末の防御集落と中世の館が重複した遺跡であったことを示し、東北地域で数多くみられるこうした重複現象が、中世段階ですでに古代末に地域の城が構えられた場が、特別な意味をもち、そこに改めて城を築くことが、中世の築城主体にとって権力の権威や正当性を示す意義をもったとした。

さらに唐川城・柴崎城・尻八館は、曲輪の整形が未熟な反面、堀が卓越して発達するという、同一系譜の特徴的な城であったことを明らかにし、その築造時期が14世紀末にはじまり、15世紀前半までに限定できるとした。この14世紀末という時期は、十三湊において都市を南北に2分した大土塁が築造されはじめた時期に当たり、また15世紀半ばという最後の改修の年代も安藤氏と南部氏の戦いの時期に一致したことを示した。そして諸状況から考え、これらの3つの山城は安藤氏の拠点城郭として機能したと評価した。

堀を卓越させたこれらの城郭構成は、これまでみすごされてきた北の城郭の特徴を示したもので、中世後期の城郭形成に、北からの堀が不可欠であったことを述べるとともに、南方のグスクと共通した郭非主体の防御のあり方は、その先のさらなる北や南との交流の中で生み出されたものだとした。

## はじめに

近年の中世城館研究は発掘調査の進展を軸に、さまざまな手法から行われている。さらに遺跡からの研究とはなお結びついてはいないが、文献史学の側から中世の領主論や合戦論の再検討のなかで、改めて中世社会の中で城館が果たした役割が論じられている。現状は、必ずしもそれぞれの研究がたがいの論点を理解した上で議論が進められているとはいえず、手放しで評価することはできない。しかし多様な関心から城館を視座に中世を読み解く試みがつづけられることは、結果として中世城館研究の実りを豊かにするものとして期待してよいだろう。

本稿は、十三湊・福島城の調査の一環として、特異な構造をもった津軽半島の一群の山城を踏査した成果をもとにしている。従来、遺跡の概要説明も充分でなく、その位置づけも伝承などによってきた。中世城館の遺跡研究が活発にされてこず、また中世の文献史料が限られる状況ではやむをえないことだったといえよう。しかし発掘成果を基準に地表面観察の判断を加えることで、時間軸を明らかにし、全国的な中世城館の発達の中でこれらの城館をとらえなおしたい。

なお踏査を行った山城は、墳館（北津軽郡市浦村）、唐川城（北津軽郡市浦村）、柴崎城（北津軽郡小泊村）、尻八館（青森市）の4つで（第2図・第3図）、簡潔な紹介をすでにおこなっている〔千田ほか1993a〕。

### 1 村の城の系譜—墳館—

墳館は市浦村磯松の古館の比高10m程の丘陵先端に立地した。後述する唐川城西麓に位置したこの地域には標高20～30m程度の低い丘陵と開析谷が複雑に入り組んだ地形が約2km四方にわたってつづき、その西端部は東から西に向かったほぼ等高の丘陵列が南北に並んでいる。墳館はその中程にある丘陵上に占地しており、館上からは五月女范原に北接した砂浜を通して日本海が一望される。聖なる山とされる羆山も間近に望むことができる。

館跡は比較的単純な矩形をしている。南北約100m×東西約50m程度の規模である。南から西にかけて現況上端幅4m程の空堀がめぐる。地表面観察での曲輪面との比高差は1.5mから2m程度で、堀部底面は平らとなり、一見箱堀状の形態を示す。現在は市浦村による公園化のために堀内に植栽が行われているが、1992年までは畑として利用されていた。おそらく堀のかかなりの部分が埋没しており、本来は薬研堀であったものと考えられる。南から西にかけた堀の対岸には土塁があり、もっとも保存状況のよいところで高さ1m程が認められる。

この堀の西面中程のところ crank 状の屈曲があり、内側の曲輪切岸もそれに連動して同様の屈曲をしている。堀の北西端部では対岸土塁が失われており、その西側は一段低い畑につながっている。この畑の北側尾根つづきとなる面には人工的につけられた切岸状の段差が認められ、そ

のラインが丘陵東側まで連続する。このラインの南側は埋没が激しいが帯状に一段低くなっており、墳館と北の丘陵つづきを切断した堀跡と評価することができる。ここをひとまず明らかな城域北端とすることができよう。

こうして地表面から堀が確認できる3辺と異なり、東辺は山道が重なることもあり、はっきりと囲郭施設をみることはできない。南辺からの堀つづきが南東角で折れ曲がって北進する状況が確認できるので、現状では対岸土塁を失って帯曲輪状にみえる部分が本来一連の堀であったとみなしてよいであろう。

曲輪内は現在、畑および草生地となっており、区画ごとに風よけの柵列が設けられている。よく削平されているが、これが曲輪の造成に由来したものか、廃絶後の畑化に伴うものか不明である。地形全体としては北東から南西へしだい下がりとなっている。堀に接した曲輪縁辺部に土塁痕跡は認められず、そのまま切岸となる。館の四周に地表面観察から指摘し得る虎口は認められない。

なお、『青森県の中世城館』によれば、さらに北東へ伸びる背後の尾根筋の上に「丘陵を横切る堀があり、郭を構成していたと思われるが、不明な部分がある」としているが〔青森県教育委員会 1983〕、今回の踏査では明瞭な堀切り遺構は地表面からは確認できなかった。本報告では、検討の余地がある北東部分をのぞき、遺構の明らかな中心部分について検討を行う。

これまでみてきた墳館の構成は、一般的には中世の典型的な丘陵に占地した館城と評価される。北西面堀跡の畑を耕作中の地権者から「瀬戸物の小壺を表採した」という聞き取りの結果もそれに符合する。しかし93年に市浦村教育委員会によって行われた館南西端部の土塁外側の小規模な発掘調査によれば、10世紀後半から11世紀にかけた遺物がまとまって出土しており、この時期に遺跡の活動が遡ることは確実となった。

秋田県以北から北海道の渡島半島南部におよぶ地域で、近年、この時期の多数の堀をめぐらした防御集落が発見されており、同じ十三湖に接した中里町の中里城でも比高約200mの山頂に中世の山城と重なって、幅・深さとも4mの薬研堀によって防御された古代末の防御集落がみつまっている〔中里町教育委員会 1990〕。

さらに津軽半島の陸奥湾側に面した標高約15mの丘陵に立地した東津軽郡蓬田村の蓬田大館からも、桜井清彦・菊池徹夫を中心とした調査で、中世の館と重なった10世紀から11世紀にかけた防御集落が発見されている〔桜井・菊池編 1987〕。蓬田大館と墳館は立地や状況がひじょうに類似した例とすることができよう。

古代末の防御集落の詳細は本章第1節の三浦圭介論文に譲るが、墳館も古代末の防御集落に使用された丘陵が中世に館としてふたたび手が増えられて再利用されたものと考えられるだろう。古代末の防御施設にも、2～3棟の堅穴住居のみといった、ごく限られた範囲だけが堀で囲郭されたものと、広い「城域」をもち、10棟を超える堅穴住居を内包したものとに区分される。しかしいずれも基本的には村落を基本単位として築かれた防御施設であり、明確に囲郭され

た範囲には大小はあるものの、集落全体の高地への立地を考えるならば、築造主体は集落内の限られた上層ではなく、上層の指導を経たものにせよ、その総意によって創出されたものと評価すべきであろう。

古代末と中世の防御施設としての立地の重複は、単にその場所が地域の中で軍事機能の発揮に適した地点であったというだけでなく、現在も数百年前に廃城にされた中世の城跡が、地域の中の特別な場所として伝承されているように、中世段階にすでにその場所が「むかし地域の城があったところ」として集落構成員に広く認識されており、改めてそこに城を構えることが、地域の権力として歴史的な正当性や権威を象徴するにふさわしい場となっていた可能性を指摘することができよう。

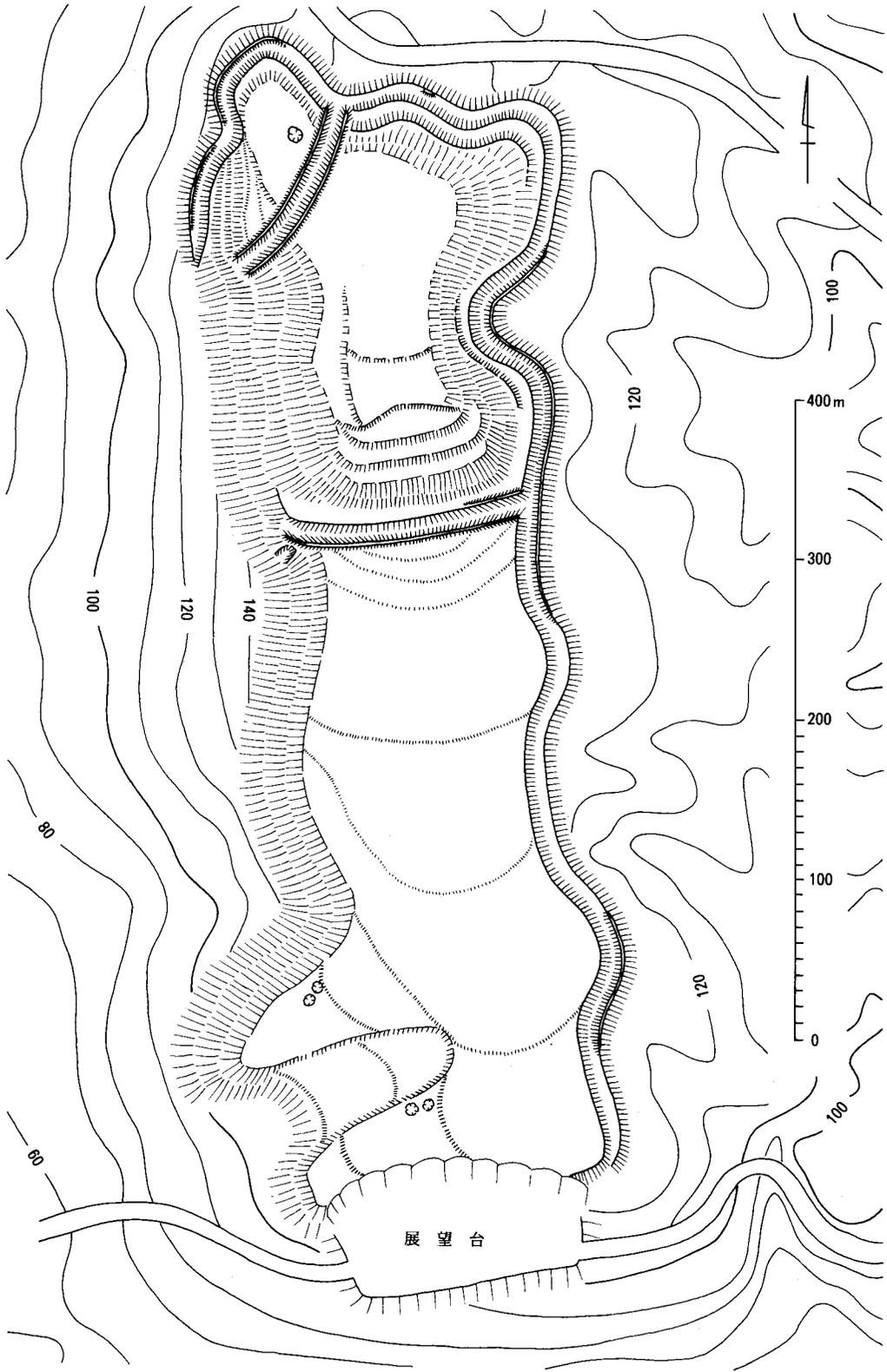
中世段階の集落立地は墳館でも蓬田大館でも詳らかではない。館に接した麓の海岸平野には中世の遺物散布地は知られておらず、また低湿な状況からも積極的に集落の推定地とすることはむづかしい。これらより、この段階の集落が現在につづく海岸線に近い砂丘の浜提上だと考えると、館と集落は墳館では数百m、蓬田大館では約1kmの距離があったこととなる。

先にあげた中里城や蓬田大館で城内の発掘調査で中世段階の明確な建物がほとんどわからないことを考え合わせると、中世段階に館として再利用されたことが確かだとしても、その使われ方は、いわゆる一般的な居館として評価すべきではないだろう。東北では狭義の城機能と日常の政庁・居住機能が一体となった館が濃密に分布する地域であるが〔千田 1990〕、中世後期を中心とした拠点城郭のあり方と、こうした村の城とは必ずしも同じ状況ではなかったことが明らかである。中世の村落規模の館が地域の中でどのような役割をはたしたのか、時期による違いや、村落における築城主体の実体と合わせて、今後の検討が必要であろう。

## 2 堀による郭の成立—唐川城・柴崎城—

唐川城は北津軽郡市浦村相内字岩井に所在した標高166m、比高約140mの山稜を利用して築かれた山城跡である。唐川城は『満濟准后日記』の永享4年(1432)10月21日条にもみえる安藤氏と南部氏の戦いにおいて、安藤氏が一旦逃げ込み、さらにここを放棄して小泊の柴崎城に転じ、この城も維持できず北海道に渡ったと伝えられる城である。しかし一級史料で直接その名が確認できるわけではなく、それらは伝承や近世以降の編纂物によってしか直接的には確認できない。

現在、城域の大半はひば林と雑木林となっており、一部が草生地となっている。山城の南に接して市浦村による唐川城跡展望台が設けられているが、これは一部城を削ってつくられたようであるが、城域は展望台背後の崖上からで、実質的には範囲外と考えてよいだろう。山頂は腕を伏せたような独立峰として高まる。そこからは360度にわたる眺望が可能であり、日本海、十三湖の状況を手取るように把握することができる。城郭の立地としては理想的であった。さらに西へ尾根をたどれば墳館に、南東に尾根をたどれば山王坊に至る要の位置を占めた。



第86図 唐川城要図 (千田作図)

比高140mという高所であること、ひじょうに広域を見渡せ、中世城館研究の全国的な成果から考えれば、それに見合った広域に及ぶ権限をもった築城主体が想定されることから、遺跡立地からみる限り、安藤氏によって築かれた蓋然性がきわめて高いとすることができるだろう。具体的な遺構からはどうであろうか。

唐川城の遺構は、特徴的な構成をもつ。地表面から観察されるプランは南北約250m、東西約100mにおよぶ。しかし明瞭に確認できる遺構は堀および土塁に限られるとよい(第86図)。中世の城郭ではまずは防御された削平地、曲輪がその主体となるのが一般的であるが、そうした常識に反した城郭遺跡である。

唐川城へは広域農道につづく山道が城域の北側にまわりこむ丘陵鞍部から城域に入るのがもっとも簡単な踏査方法であり、ここからはすぐに城域最高所を占めた山頂にたどり着くことができる。一般的に城郭の中心部分と評価される山頂部分でも尾根上の削平はほとんど認められない。地表面から観察する限り、尾根上はゆるやかに自然の傾斜で下がっていく。

ところがそうした自然斜面をつたって南に尾根筋を下ると、尾根を断ち切る堀切りが現れる。堀の規模は現況で上端幅4~5m、深さ1.5~2m程度である。堀底部分は埋没していると考えられ、本来はUもしくはV形の断面であったと推測される。堀切りは、より上位の空間であったと考えられる山頂側に幅2~3m程度の帯状に伸びる削平地を伴う。この帯曲輪を堀の内側に設けたことによって、堀の突破阻止力とかみ合った強力な防御陣が機能したことが理解される。

さらに山頂を挟んでこの堀切りと反対に位置する尾根上にも堀切りが備えられる(現在この北側の堀切りには土橋があるが、形態からみて後世の付加であろう)。つまりこの2つの堀切りによってたしかに山頂部は周囲から防御され、城として成立しているのであった。通常、主要尾根筋を削平し、人工的につくり出した傾斜転換線を明確にして、それより下部を人工急斜面(切岸)で整えることによって、城郭の基本的な防御性は成り立った。

しかし唐川城では曲輪と切岸は連動しない別のものとしてあつかわれ、堀とその内側の帯状防御陣の組み合わせが単独で卓越し、通常防御線が構築された傾斜転換点より下位の場所に施されることによって、城が生み出されていたのであった。

この城では日本海に面した西側斜面は急峻な崖地形となるため人工的な防御施設は必要なかった。ゆるやかに派生尾根が伸びた東側斜面には先述した堀切りと同様の構造をもった堀遺構が南北に延々と蛇行しながら展望台近辺までつづく。堀と内側の防御陣のセットで城を成り立たせる手法が一貫していたのである。

別言すれば、内部の削平地と周辺の防御の急斜面の一体化した面体=曲輪によって成り立っていた列島中央部の城郭に対して、削平地は防御的には機能せず(この場合は広大な空間をひとまず囲い込むことに主眼がおかれていた)、城壁や堀といった防御施設そのものが独自に線体=郭として成立した城郭であったと評価できる。これは従来の列島中央部を規範としてきた中世城郭の構成とは大きく異なった城郭の考え方としなければならない。

唐川城の構成は、明らかに中世後期の東北における山城とは異なり、それ以前のものであることは間違いない。しかしきわめて異質な構成であるため、上述の評価が成り立ちうるか追検証が必要であろう。そこで、歴史的にも深い関係をもったとされる柴崎城のプランと比較検討する。

柴崎城は北津軽郡小泊村嗽沢の標高100m、比高90mの派生尾根上に築かれた山城であった。現在の小泊集落の中心から西北に約2km離れるが、漁港を真下に見下ろす。城からは小泊湾はもちろん津軽海峡・北海道方面の日本海を一望することができる。

城の北から東にかけては日本海への猛烈な断崖で、まったく人を寄せつけない。西方は小泊半島を構成する山塊に連なった深山であった。また南東側には急な谷筋が入り込んで、通行を遮断する。城の遺構を破壊して林道が1987年に付設されているが、往時はきわめて要害な地形であったといわなくてはならない。

しかしこの立地は要害なだけでなく、実は半島の反対側になる下前から尾根伝いに山塊を越える最短コースの山道が小泊方面へ抜けてくる地点であり、海上交通だけでなく、陸上交通の要衝を押さえた場所であった。

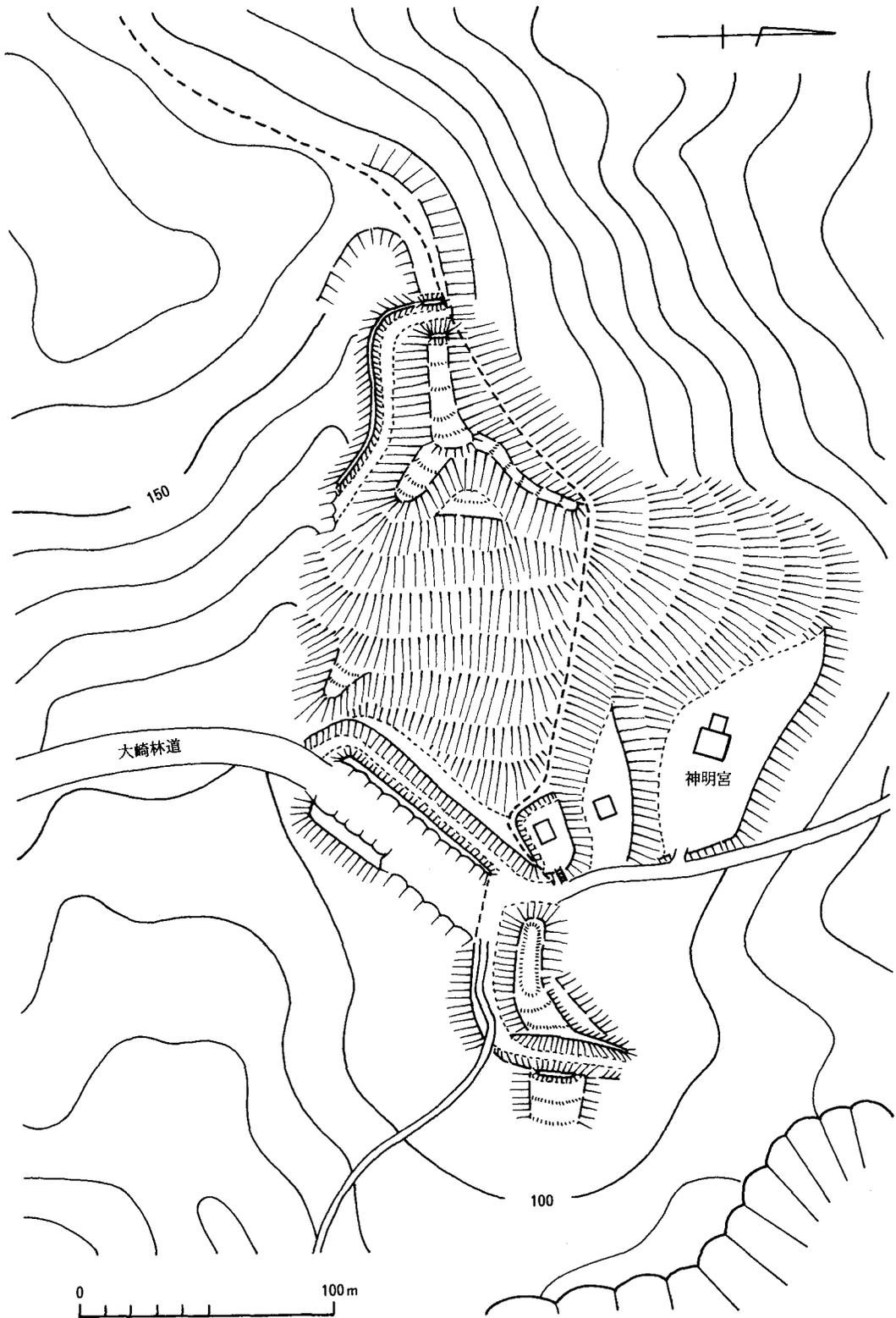
柴崎城は唐川城と同様の手法によって築かれたといえる（第87図）。城郭は北側の下っていく派生尾根上にあり、東から谷筋が入り込んで尾根が細くくびれた按部に、対岸に土塁を備えた堀切りが設けられていた。この堀切に接した内側が主郭に相当したが、削平は未熟で自然地形を多く残す。切岸も決まっていない。この主郭に続く尾根はしばらくして北と東に分かれるが、いずれの尾根上も自然に下っていき、曲輪として整形された痕跡を地表面観察からはほとんど確認できない。

西側斜面はそのまま日本海を直下に望む断崖のため堀はめぐらない。ただし現在、この断崖の上を細い山道が按部の堀切りを越えて奥の山へとつづいている。これが下前から来た山越えのルートに違いない。この道が城の機能した当時からこのように通っていたかは大きな問題である。もし当時もそうであったとすれば、この城は街道を城内に引き込み、関所的機能を合わせもったということになる。

しかし山道を直接チェックした虎口が認められず、城内に街道を引き入れて直上から攻撃したはずの主郭ほかの曲輪が未整形なのは、城域中心部に街道をわざわざ通した意味はない。こうした諸点から現況のように山道が城内を通過したのは廃城後であり、本来は城の手前で街道が曲がっていたと考えるべきであろう。

尾根の按部に設けられた堀切りから東への斜面には、谷の北の肩に沿って堀切りつづきになる堀とその対岸土塁が遺存する。その東端部は長年の風水による崩落で失われており、もともとはさらに東に向かって伸び、おそらく後述する東中腹の南北堀と結びついていたと復原できる。

現状では先の山道が尾根の突端から東へまわり込み、ゆるやかな北東への尾根筋をつたうラインの北側が明らかな急斜面となる傾斜転換線をつくっているから、尾根の堀切りから伸びた城域南の東西堀と合わせ、かなりの面積を有した北東向き斜面を城域に取り込んだことになる。とこ



第87図 柴崎城要図 (千田作図)

ろがごくわずかな削平段の微細な痕跡以外、ここでも明瞭な曲輪化は認められない。こうした特徴は唐川城とみごとに一致したといわなくてはならない。

さらに現在、林道が近接して走るのでわかりにくくなっているが、中心の城域から数十m程自然に下り、やや傾斜がゆるやかになったところに南北方向の堀が築かれている。ここでも堀の対岸土塁があったようだが、堀切岸のほとんど際まで破壊されてしまったので明確に確認することができない。

また堀の南端は主郭から東に伸びた尾根筋の先端が張り出し、それに合わせて東に大きく折れ曲がったところで林道に寸断されてしまっている。この部分は自然の谷筋にそのままつながる位置であったから、按部からつづいてきた堀と合流して谷に豎堀様に落として処理されていたと復原すべきであろう。ここで、もうひとつ注目しなければならないのは、南北堀の城内側に帯状の防御陣が組み合わされていたことで、この手法も唐川城とまったく同じものとすべきである。

一方、この南北堀の北端は神明宮の本殿への尾根按部の掘割道に至る。ここも近年の手が入ってしまい、旧情をそのままみることにはできないが、おそらくこの掘割道はもとの南北堀と一体となった堀切りであったとみて間違いないだろう。神明宮への参道はここから北東に下っていく。

参道がほぼ等高に伸びて、さらに屈曲したあたりの北側から、再び尾根筋を断ち切った堀切りが姿を現す。対岸に土塁を備えた整った堀切りであった。現状は参道と重なって西半部が埋没しているが、先の南北堀とひとつづきの堀ラインであったことは明らかである。この堀切りによって取り込まれたゆるやかな尾根も上面をていねいに削平した様子は認められず、自然地形を残す。本体部分とまったく同じ状況であった。

このように柴崎城は西面の断崖を背後の守りとし、東斜面に人工的に堀をめぐらすことで、防御の完備をはかった城であったことが知られるのである。そしてその築造手法は細部に至るまで唐川城との強い共通性を指摘することができ、一見特異にみえた堀と組み合わされた帯状の防御帯によってつくられた城郭が偶然の所産ではなかったことを明らかにすることができた。

それではこうした特徴的な山城プランはいつ成立したのであろうか。唐川城、柴崎城とも発掘調査が行われていない現状では、細かな築造時期を判定することは困難である。しかしすでに発掘調査が行われ、同じ津軽半島にあった尻八館が、これまでみてきた両城と同一の手法によって築かれたと考えられるので、これを基準にして築造年代などの諸問題をさぐる手がかりとできるであろう。つぎに尻八館の検討を進めよう。

### 3 安藤氏と城郭群—尻八館—

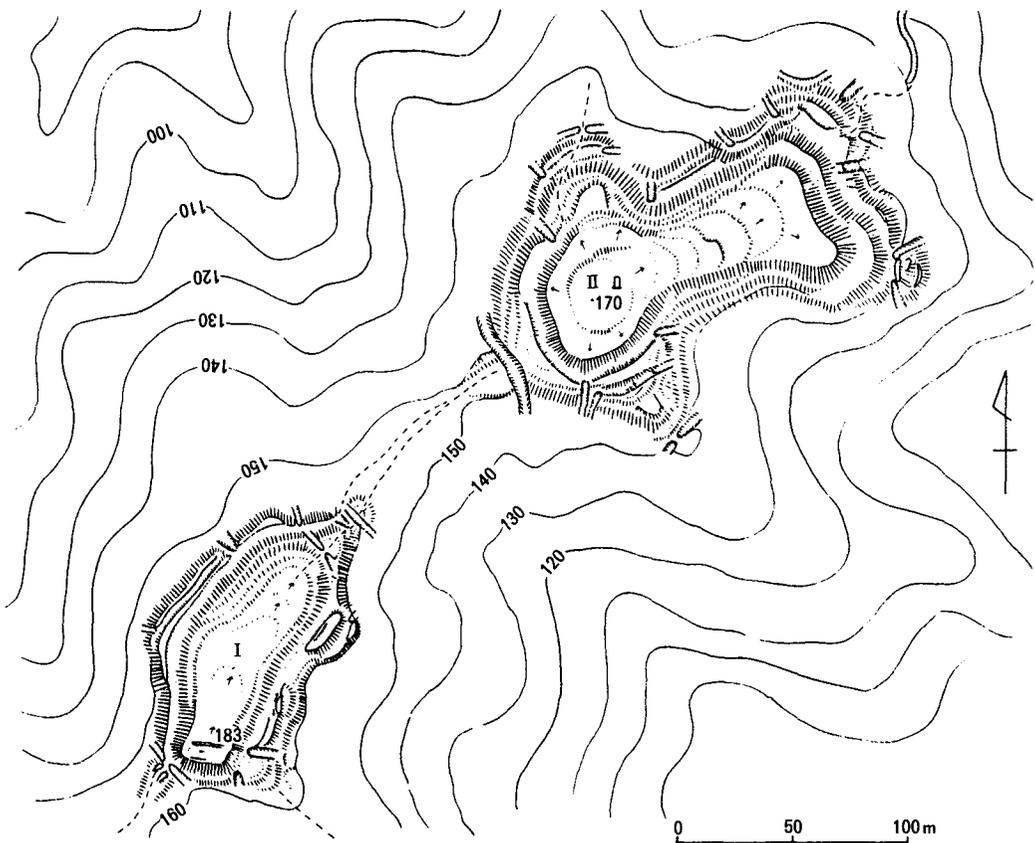
尻八館は標高182m、比高160mの尾根上に築かれた山城であった。山麓から小さなピークを越えたやや奥まった山頂に立地し、陸奥湾側への眺望は良好であった。麓の後潟は城の機能した当時、かなり内陸まで潟が入り込んでいたことが推測されており、港湾機能を押さえた山城であっ

たと評価されている。1977年から1979年にかけて村越潔・桜井清彦らを中心に発掘が行われ、報告書がまとめられている〔村上潔・三上次男ほか 1981〕。

山城跡は伐開と園路の整備が行われており、着実な整備が行われている。城の中心部はⅠ郭、Ⅱ郭と名付けられた2つのピークを利用して南北に並んで構成される(第88図)。Ⅰ郭は全体的に削平が甘く、ほとんど自然地形のままである。Ⅱ郭は北東の城域先端部に帯曲輪を重ねてできた明瞭な段差があるが、Ⅱ郭内には小規模な切岸が散発的にあるのみで、やはり自然地形を残す。

こうした尻八館の構成の特徴は、まさに唐川城、柴崎城に共通したものと見える。そして両郭の周囲には多彩な堀が配置されていた。Ⅰ郭では尾根の一段下に堀がめぐり、小さな派生尾根の部分では2重の堀切りにされていた。さらにこの堀めぐりから堅堀が枝分かれして堀底を区分していた。Ⅱ郭でも2重の堀切り、堅堀、堀切りつづきの堅堀など曲輪の未熟さとは対照的な鮮やかな堀の発達を確認することができる。これも唐川城、柴崎城の堀の特徴を一層明確化したものと評価できる。

これら地表面観察の成果に発掘の知見を加えて城内の状況を観察すると、Ⅱ郭中央部では、掘立柱建物や柵列等が検出され、多数の貿易陶磁、珠洲焼、瓦質製品、鉄器、銅製品などが発見さ



第88図 尻八館要図(『尻八館調査報告書』により村田修三氏作図。『図説中世城郭事典1』所収。)

れている。これらは城内での一定の生活を裏付けた資料といえよう。また北東先端部の帯曲輪からは堅穴建物が段差に沿って検出されており、兵舎のような役割を果たしたものとみられる。

地点としてはⅠ郭が最高所を占めたが、城郭としてはⅡ郭が中心であったと考えるべきである。そして注目されるこれら遺構の築造年代は、出土した遺物の組み合わせから14世紀末に創築され、15世紀前半に基本プランが成立し、15世紀後半には廃城となったと評価される。

この時期はまさに十三湊を拠点に安藤氏が活躍した時期に含まれ、ことに尻八館が創築された14世紀末は、十三湊の都市域を南北に2分した大土塁が築造されたときに一致した。十三湊だけでなく安藤氏の領域全般にわたって、軍事的な緊張を背景とした大きな画期であったことがわかるのである。尻八館と同一の構成の特徴をもった唐川城、柴崎城もこれを前後した時期に、今日みるプランが整う画期があったとして間違いないだろう。若干の創築年代の差はあるとしても3城は同時期に機能したとみるべきである。

これまでみてきた曲輪の未熟と卓越した堀をもった一連の城郭は、先述のごとく比高差が大きく小規模な在地領主の城とは考えられない。広域の権限をもった築城主体が予測されるのである。そして一貫したプランの共通性から築城主体には強い関連性が伺われる。それぞれの城の成り立ちや築造主体を文献史料から細かにたどることは不可能だが、これまでの城郭遺構からの検討によって以下のように整理して考えることは可能であろう。3城のうち最大の規模をもち、もっとも古拙的要素が高い唐川城が十三湊に隣接して日常の詰の城として機能した。津軽海峡への海運の押さえとして柴崎城があり、陸奥湾側の海運を掌握した拠点として尻八館が築かれていた。このようにみれば、3城の立地を合理的に把握することができる。

しかし広域に及ぶ3城を一元的に把握したとは考えにくく、同様の拠点城郭が3つ並存したあり方からみれば、安藤氏の権力はこれら各城郭を直接の拠点とした一族などのゆるやかな結合によって成立していたとも考えられよう。そして尻八館にみられたように安藤氏に対して南部氏の侵攻が激化した15世紀前半に城の改修が行われていたことは、断片的に知られる安藤氏の動静とも、まさに一致する。3城は安藤氏に関わった拠点城郭であったと評価できるのである。

#### 4 列島からみた東北の山城

これまで明らかにしてきた東北北部における城館のあり方は、関東以西の地域とは大きく異なった城館の発達であった。畿内地域では16世紀後半にならなければ曲輪の四周を完全にめぐる堀は出現しない。これまでも東北地域では16世紀はじめにはそうした堀が出現していたことが知られていたが、そうした伝統がさらに14世紀末にまで遡ることが明らかになった。それは曲輪=切岸の発達を中心にした西の山城に対する、堀を中心にした東あるいは北の城の発達であったといえよう。

近年発掘された15世紀第3四半期を下限とした福島県の猪久保城などは、堀切りや堅堀と曲輪

が連動した「東と西の融合」によって生み出されており、そうした山城の姿が室町・戦国期を貫く幹となっていた〔千田 1994 a〕。そうした全国的な城郭形成史に立つとき、従来はみすごされてきた堀の卓越による北の山城の系譜が、いかに重要であったかいうまでもないだろう。こうした西と北あるいは東の城郭技法の融合は、南北朝内乱期の活発なひとの交流と軍事的な緊張によって実現したといえるだろう。

また尻八館にみられた城内への居住は、15世紀後半から築造が開始された北海道における和人の拠点、上ノ国勝山館、さらには松前大館によって開花した山城内への主要家臣の居住といった、北の中世拠点城郭の特質を予兆させるものであった。関東以西の列島では16世紀第2四半期を境に、戦国大名権力を背景とした山城への拠点城郭の移転と位置づけられる、戦国期拠点城郭が成立していった〔千田 1994 b〕。こうした拠点城郭の山城化といった点においても北の地域は先んじていたこととなり、独自の展開を示したのであった。

つぎつぎと堀を主体とした山城が津軽半島で築かれていった14世紀末ごろ、沖縄を中心とした南西諸島では、グスクの石垣化が大きく進展していた〔千田ほか 1993 b〕。これらのグスクもまさに凸形の城壁が防御陣として機能することで成り立った城であった。曲輪内からも高くそびえた城壁に遮られて防戦を行うことは不可能であったのだ。この点、城壁と堀という正反対の防御遺構であっても、曲輪ないし曲輪切岸を防御の主体としないという構成は、共通した考え方と評価できる。

北と南といった列島の端部において城郭は、手法は異なりながら、確かに同じ道を歩み始めていたのであった。しかし沖縄のグスクが中国を核とした東南アジア世界の城郭構成の強い影響によって成立していたように、列島の端部であったことは、そこからさらなる南方・北方世界との密接なつながりのなかで、城郭の特質も形成されたことを示しており、東北北部の城郭プランも改めて現地遺構に立脚した比較研究によって、さらに北の視点から照射することが求められよう。

#### 参照引用文献

- 青森県教育委員会 1983『青森県の中世城館』。  
桜井清彦・菊池徹夫編 1987『蓬田大館遺跡』六興出版。  
千田嘉博 1990「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』第129号。  
千田嘉博・小島道裕・宇野隆夫・前川要 1993 a「福島城・十三湊遺跡1991年度調査概報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集。  
千田嘉博・小島道裕・前川要 1993 b『城館調査ハンドブック』新人物往来社。  
千田嘉博 1994 a「中世の城郭」『歴史と地理』第463号、山川出版社。  
千田嘉博 1994 b「守護所から戦国期拠点城郭へ」『文化財学論集』真陽社。  
中里町教育委員会 1990『中里城跡Ⅰ・Ⅱ』。  
村上潔・三上次男ほか 1981『尻八館調査報告書』尻八館調査委員会。  
村田修三編 1987『図説中世城郭事典1』新人物往来社。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

## Mountain Forts in Northern Japan

SENDA Yoshihiro

This paper examines structural remains from mountain fortifications in the northern Tōhoku Region, which to date have not been analyzed in detail. Fun Fort, Karakawa Castle, Shibazaki Castle and the Shirihachi Fort sites were selected for analysis.

Results show that Fun Fort is a fortified settlement dating to the late 10th to 11th centuries, overlain by a medieval castle. This double structure is commonly encountered in Tōhoku sites for some reason, the existing fortified settlements were torn down and rebuilt during the medieval period. The medieval occupants of the fortifications may have seen this action as a means of proclaiming and legitimatizing their claim to power.

Karakawa Castle, Shibazaki Castle and the Shirihachi Fort, based on the presence of well developed moats, can probably be dated to the late 14th to early 15th centuries. Confirmed acceptance of this dating, however, may be a bit premature. In the late 14th century, construction was started on a large earthwork structure that divided the port city of Tosa-Minato into north and south halves. By the mid 15th century, when this project was completed, the Andō and Nambu Clans were at war. Taking into consideration all the available data, these three mountain fortifications can most likely be interpreted as fortified bases of the Andō Clan.